暴力による死からの回復
―吉本ばなな『キッチン』からみる死との向き合いを巡って―

近　藤　正　樹

１．はじめに

人間をこの世界に産み落とし、その後再び人間を異世界に還してしまう超越的存在から死を宿命付けられた。そして死の宿命を自覚することまで宿命付けられた。人間は、自らの死を認識するからこそ、生のある内に死を恐れ、苦悩する。愛する他者の死も同様に、あたかも自らの肉体の一部を奪い去られたかのような衝撃を受けるものである。

真言密教の開祖として知られる弘法大師空海は、「それ生はわが願いにあらざれども、無名の父、我を生ず。死は我が欲するにあらざれども因業の鬼、我を殺す」[1] と慟哭の言葉を遺している。自らが望んでこの世に生を受け生まれて来た訳では無い。しかし、自らが望んでいなくても死は免れようもない。このような理不尽な生命の生と死は、まさに因縁の業と呼ぶより他仕方が無いのではないだろうか。

個別的生命は、まさに超越的存在からいつの間にか与えられ、答えを求めても何も得られない間に容赦なく奪い去られて行く。人の「生き死に」の問題は、超越者による宿命によって背負わされた問題である。そのような意味では、人の手によるものかそうではないかに関わらず、自然による生と死の問題も暴力性の観点から論じることが可能なのではないだろうか。

死を自覚していながら、死からは逃れられない運命を背負う私が、他者の死に出会うことで、私の意識はどのように変容するのだろうか。特に死別

(bereavement) による喪失 (loss) という視点から見た人間存在について、この論文で考察し、議論を深めていきたい。そして死別による喪失についての議論を深めることで、暴力により傷付いた人間存在からの回復という問題についても考察してみたい。暴力を論じるときに、自然による強制力である死の問題とは分離して考えることも大切である。しかし、暴力や権力や強制力によって生じた喪失からの回復も、その過程においては、共通する部分が大きいと考えられる。従って、死別による悲哀について考察を進めることで、暴力における喪失からの回復の過程も明らかにすることができるのではないか。まず、フロイト、ボウルビィ、キューブラー＝ロス、西田幾多郎を取り上げ、悲しみの過程について議論を批判的に考察してみたい。次に、吉本ばななの『キッチン』の中に見る喪失体験後の心的過程の変遷と暴力による死との向き合いについて論じることが、本論文の目的である。

人間が、死別に対してどのように向き合っているのか、また死という圧倒的な出来事から人生の意味を見出すには、という問いを発することは、人間存在に関わる問いとして必要な問いではないだろうか。本論文ではまず、悲しみの心的過程の理論を整理しながら、死が孕む暴力性の視点から、人間存在の回復への理解を深めて行きたい。

2．悲しみの過程

(1) フロイトの喪の作業とフロイト自身の死別体験

死別の喪失からの悲哀の過程を心理学的な立場から最初に論考したのは、フロイトであった。フロイトは、論文「悲哀とメランコリー」の中で、死別体験者の悲哀の心的過程の変遷を「喪の作業」(Trauerarbeit)[2] と名付けた。ここでフロイトは、「悲哀」と「メランコリー」を対比させて論じている。悲哀の定義を「きまって愛する者を失ったための反応であるか、あるいは祖国、自由、理想などのような、愛する者のかわりになった抽象物の喪失に対

する反応である」[3] とし、その特徴は、「時期がすぎれば悲哀は克服されるものと信じていて、悲哀感のおこらぬことはかえって理屈にあわぬ不健全なことと思っているのである」[4] とした。そして、一方の「喪の作業」を「現実検討によって、愛する対象がもはや存在していないことを理解し、その対象へのリビドーを断念させること」[5] と定義した。フロイトの考えでは、人間が愛する他者の死に際して感じる悲哀は、自身の自我（Ich）の中に存在する愛する他者を喪うことによって起こるものとされる。このフロイトの論文により、死別による喪失が精神医学や臨床心理学の中で研究されることになった。

更にフロイトは、「快原理の彼岸」の中で「欲動とは、より以前の状態を再興しようとする、生命ある有機体に内属する衝迫である」[6] とし、そこから生命の究極の目標を以下のように結論付けた。

> 生命のあるものがかつていったん放棄したものの、あらゆる進化発展の迂路を経ながら帰り着こうとする昔の状態、生命の出発点である状態でなければならない。生命あるものはすべて内的根拠に従って死に、無機的なものへと帰ってゆくということを、例外なき経験として仮定することが許されるなら、われわれは次のようにしか言いようがない。すなわち、あらゆる生命の目標は死であり、翻って言うなら、無生命が生命あるものより先に存在していたのだ、と[7]。

フロイトは、生命の内にある無機的状態の本に帰ろうとする欲動を「死の欲動」（Todestrieb）と名付けた。この死の欲動とは、生命を内的緊張が生じない状態である元々の物質の状態に還ろうとするものである。その一方で生命は、無機質から生命が誕生し二つの個体に分裂して以来、分裂した個体同士が再び融合することによって生命の刷新を行ってきた。この融合と刷新を断続的に行うことで生命の不死性を確保しようとするのが、生の欲動

(Lebenstrieb) である。フロイトは有機体が生まれた時点にまで遡り、それ以来単細胞生物から多細胞生物、そして人間へと進化する過程の中でも受け継がれて来た根本的な生命の意識の中に、「有機的生命体を生命なき状態へ引き戻すことを使命としている」[8] 死の欲動と、生命を長らえて保持しようとする生の欲動が同時に存在するとした。

また、論文「自我とエス」の中では、メランコリーの説明の中で、「同一化」(Identifikation) により愛する対象が喪われた場合、その対象を自我の中に打ち立てて、自我変容を行うとされた。それまで同一化は、メランコリーによる病的な悲嘆に限定されていたが、自我の形成にまで拡大して用いられるようになり、悲哀の心的過程の特徴としても理解することができる。ただ、この中で批判されてきたことは、「同一化の過程で口唇期の機制へのある種の退行ともいえるこの取り込みを通して、対象の断念を容易ないしは可能にしているのかもしれない」と推論した点である。元々フロイトは、同一化の特徴を「個人の原始的な口唇期においては、対象備給と同一化はおそらく区別不可能な状態にある」とし、「早期の成長段階において頻発するもの」と理解していた。そこから悲哀の心的過程を愛する対象との死別によって、自己のナルシズムが脅かされる状態にさらされた後、人格の退行が行われ、同一化を通して再び人格の統一がなされるとした[9]。

フロイトによる喪の理解は、その後多数の研究者が取り上げ、現在の死別研究にも多大な貢献を果たしている。その一方で、フロイトの言うような悲哀の理解は神経生理学的な視点からの考察であり、実際の死別の悲哀の一面を論じているに過ぎない。フロイト批判の第一に、悲哀は時間が経てば克服されるものとされたが、リンデマンが指摘したように、grief[10] には時を経ることで解決される「正常な悲嘆」(normal grief) だけでなく、時が経っても解決しない「病的な悲嘆」(morbid grief) があり、時がすべてを解決するという考えは「死別神話」であるというものがある[11]。フロイト自身も指摘しているように、現在では悲哀からメランコリーへは移行し易く、それ意

外の二次的な精神疾患を伴うことがあることから、死別反応の中には臨床的な関与の必要性があるものがあるとされている[12)]。ここから更に、悲哀をどう扱うのか、遺族自身が取り組むべき問題（Trauerarbeit）なのか、専門家による治療（care）が必要なのか、遺族会などの自助組織が必要なのかという議論が起きている[13)]。第二に、愛する対象が喪われた場合、同一化による自我変容が起こるとされ、喪失の対象を同一化によって自我に取り込めない間は、口唇期の機制への退行が生じるとされた点である。退行とは、リビドーがある所に固着してしまいそこで停滞が起こることである。確かに、人は愛する他者を亡くすと、一時的に混乱し、取り乱すことがあり、いつも死者のことを考えたり、遺品にこだわったりもする。それを退行と呼べなくもないが、しかし、愛する他者を自我の中に取り組み、同一化が果たされリビドーの固着が減ずれば、それで解決するとは考えられない。

ここまで、フロイトの喪の作業を振り返りながら、死の問題を考察してきたが、悲哀についての概念を考察したフロイト自身も死別による体験を重ねている。1919年に財政上の恩人でもあり、友人のアントン・フォン・フロイントを癌で亡くし、「日曜日の子」と呼んでかわいがった娘の「花咲くゾフィー」を26歳の若さで喪っている。次いで、1922年には姪のツェツィーリエ・グラーフが自殺し、更には、その翌年に孫のハインツ・ルードルフ・ハルバーシュタットもわずか4歳半で亡くなった[14)]。1920年の友人プフィスターへの書簡の中で彼は娘の死のことを以下のように述べている。

> 「私はできる限り働いています。気を他へ逸らせて下さったことに感謝しています。子供を一人失うということは、いわば重いナルシシスト的な傷心であるような気がします。悲しみといったようなものは、おそらくそのあとに襲ってくるのでしょう」[15)]

また、1923年のレヴィー夫妻宛てへの手紙には、孫の死については、堪え

難い悲しみを次のように表現する。

「この喪失には私はとても堪えられません。これ以上につらいことを体験したことはないように思います。おそらく私自身の病気による衝撃もそれに輪をかけているのでしょう。私はやむを得ず自分の仕事をしていますが、一切は結局のところどうでもよくなりました。この子の死には耐えられないように思います」[16)]

そしてエディプス・コンプレックス理論を打ち立てる契機となった、父であるジャコブの死もフロイトは経験した。また他方では、フロイト自身は無神論者と自らを語り、精神分析理論を構築する中で離反して行った、ユングやアドラーなどのかつての弟子を徹底的に批判し、相手が和解しようとしてもそれを一切受け入れなかった。

これらの多様な歴史と数多くの愛する者の死を経験しつつも多くの論文を書き上げたフロイトではあったが、フロイトが考察した悲哀の心的過程と彼自身の理論との間には開きが在るものと考えられる。フロイト自身も自らの分析を基に、悲哀の心的過程を十分に論じ切ることはできなかったのではないだろうか。そこには、繰り返し訪れる愛する者との別れの中で、その悲しみに命が削られる思いをしながらも、自らの仕事をやり通したフロイトの強い意志の力を感じられるが、しかし悲しみに圧倒され、絶望する姿があった。

（2）ボウルビィの内的作業モデルと悲哀の4段階

イタリアの孤児院の調査を行ったボウルビィが、ハーロウの小猿の愛着行動の研究を基に「愛着理論」（attachment theory）を提唱し、人間が有する他者との間に持続的で親密な結び付きを求めようとする傾向と、一端持続的で親密な結び付きが得られれば、愛着対象が目の前に存在しなくなっても、「内的作業モデル」（internal working model）と呼ばれる愛着対象を内的な

心像として保持することで心理的な安定が保たれるとした。更に、ボウルビィは愛着についての研究を進め、愛着の獲得に失敗し、愛情あふれる養育を受けなかった場合を「母性的養育の剥奪」（deprivation of maternal care）と呼び母性的養育の剥奪を経験した群と経験しなかった群を比較した場合、前者の方が発達の遅れ、罹病率、死亡率の高さなどが認められた。また、『母子関係の理論Ⅲ　愛情喪失』では、詳細なデータを基に、近親者を失った成人の悲哀の心的過程を４段階で説明した。悲嘆の感情を味わえず、「無感覚」（numbing）になるまでの段階が、第１段階で、一般的に数時間から一週間連続し、漠然としていて死の知らせを受け入れられない段階とされる。時に、非常に強烈な苦悩や怒りの爆発に終わることもあるとされる。次に続く、第２段階の「思慕と探究：怒り」（yearning & search：anger）の段階では、数ヶ月ときには数年続くとされ、喪失を事実として受け止め始め、喪った対象に対して思い出に浸り強い思慕の情に悩まされたりする一方で、喪った対象を激しく求めようとする気持ちが、沸き起こる。この段階では、対象喪失の事実を十分に受け入れられず､怒りや抗議の気持ちが見られることもある。第３段階では、喪失が生じたことをよく理解するが、その喪失が永遠に続くことを知り、抑うつや無感動の状態に陥ったり、強烈な孤独感や寂しさを感じる「混乱と絶望」（disorganization & despair）の時期である。最後の第４段階が､「さまざまな程度の再建の段階」（greater or less degree of organization）と言われ、悲しみに耐えこれまでの３段階を経て、喪失の体験を事実として受け入れ、その体験をもとに自分の生活を再建することを受け入れる時期とされている。この段階についてボウルビィは以下のように述べている。

> 悲哀から好ましい結果を期待するには、死別者が感情の打撃に耐えることが必要であると思われる。悲しみに耐え、多かれ少なかれ意識的に死者を探求し、喪失の経過や原因について検討を繰り返し、責任があると

思われる人に対して、死者も含めて怒りをぶちまけたりすることに耐えられた場合にのみ、喪失が永続的な事実であり、自分の生活は再建されなければならないことを認めて受け入れることができるようになるのである。この経過をたどることにより、初めて自分の以前のパターンがもはや役に立たないものとなって、取り去らなければならないことを、完全に自覚できるようである[17)]。

まずボウルビィにおいて、死別者のモデルとして積極的に喪の作業に取り組んだものだけがこの最終の段階にたどり着けるとしていることが批判されるのではないだろうか。特に日本人の死の悼み方からすれば、このようなモデルの方が稀なのではないか[18)]。現代ではむしろ、死を悼むことが出来にくくなっていることは確かに問題であるかも知れないが、リンドストロームなどは怒りを周囲にぶちまけたときに生じる社会的孤立を問題視している[19)]。そして、この様に死別の問題に真正面から向き合わなくても、安定した時期を過ごせるのではないだろうか。この悲哀の4段階では、幼児の発達段階に似て、課題を乗り越えながら、直線的に悲哀の心的過程を進まなければならなくなってしまう。そして乗り越えられた課題は、もう過去の遺物として消し去られてしまう。また、「自己と場面の再確認は、もっとも強烈な情緒をともなうかもしれないが、それが単に感情の表明ではなく、すべてがそれにもとづく認知行為である（中略）死別した後の生活場面で起こってきた変化にともなって、自己の内面の代表的なモデルを整理して作り変える過程である」[20)] と述べているが、ここでも再確認をした後の変化が求められている。

その一方で、愛着対象を内的な心像として保持することで心理的な安定が保たれるとする内的作業モデルの考え方を取り入れれば、「死んだ配偶者に対する愛着の感情が維持されることを望むからこそ、自己確認が維持され、意味のある方向に沿って自分の生活を再建することができるようになる」[21)]。この様な形で、愛着対象からの「脱愛着」（detachment）が計られれば、4

段階のそれぞれの過程に取り組み乗り越えなくても良いのではないだろうか。

（3）キューブラー＝ロスの死に行く過程の五段階と Decathexis

終末期医療（terminal care）に取り組み、死と死ぬ過程や死の看取りについて多くの著書があるロスは、臨死患者への面接調査を行い、死に行く過程を五段階に分類し、明確化した。第1段階は「否認と孤立」（denial & isolation）と呼ばれ、自身の身体が死に瀕しているという予期しない衝撃的な知らせを聞かされたとき、大きな衝撃を受けないために、まず否認をして現実を受け入れずに、他人や正しい情報から自らを隔離するという姿勢を示す。第2段階では、死という現実を受け入れるに従って、次に「怒り」（anger）の気持ちが取って代わる。この怒りが、看護師などの医療者に向けられ、患者の周囲の人間が患者を避けるようになり、対人的な接触が困難になることもある。第3段階は、「取引」（bargaining）の段階と呼ばれ、死が近づきつつあると知ると、医師とどうしたら延命できるか取引したり、あるいは、苦痛を取り除いてくれるように願ったり、神仏に頼る。第4段階では、「抑うつ状態」（depression）に入る。取引も無駄であることを知って、患者は死が避けられないことを悟り、大きな無力感、身体機能の減衰、絶望感、喪失感を感じる。今生との別れを覚悟するため、他人からは癒されない絶対的な悲しみを経験する。この悲嘆をロスは「準備悲嘆」（preparatory grief）と呼んでいる。第4段階と第5段階の間で生じる準備悲嘆は、悲しむことを許されることで、目前に迫った自分の死をより受け入れることができる。最後の第5段階で、「受容」（acceptance）と呼ばれる段階に至る。ロスはこの段階を以下の様に述べている。

> 受容を幸福な段階と誤認してはならない。受容とは感情がほとんど欠落した状態である。あたかも痛みが消え、苦闘が終わり、ある患者の言葉

を借りれば「長い旅路の前の最後の休息」のときが訪れたかのように感じられる。そしてこの時期は、患者自身よりもその家族に、多くの助けと理解と支えが必要になる。死に瀕した患者は、いくばくかの平安と受容を見出すが、同時にまわりに対する関心が薄れていく[22)]。

これまでの各段階を繰り返しながら、受容の段階の中で断続的に起きる準備悲嘆を経て、最終段階の「Decathexis」(脱充当)に到達する。

著書『死ぬ瞬間』でロスは、死と死ぬ過程についての調査への姿勢を以下の様に述べている。

患者を一人の人間として見直し、彼らを会話へと誘い、病院における患者管理の長所と欠点を彼らから学ぶという、刺激にみちた新奇な経験の記録にすぎない。人生の最終段階とそれにともなう不安・恐怖・希望についてもっと多くのことを学ぶため、私たちは患者に教師になってほしいと頼んだ。私はただ、悩みや期待や不満を語ってくれた患者たちのことを語るだけだ[23)]。

この様な姿勢で終末期の患者の面接調査に望んだロスは、医学部の学生や牧師と共にその面接に臨んでいる。『子どもと死について』の中では、「死を恐れ、死と闘うのではなく、死を知ることができれば、生を人に教え導くことができる」[24)] と語っている。ロス自身も数多くの人から、様々な形の「喪失体験」(loss experience)についての語りを聞きながら、死について学んだのである。フロイトやボウルビィが科学的な姿勢から悲哀の心的過程についての分析を行い、宗教性を排除したのに対して、ロスはこの面接調査自体を医学生の教育の場として位置付け、また終末期の患者自身の死の準備に共に取り組んだ。受容の段階までに至った患者には、以下のような姿勢で臨んでいる。

> 患者とともに、窓の外の鳥のさえずりに耳を傾けるのでもよい。私たちがそばにいるだけで、患者は最後まで近くにいてくれるのだと確信する。重要なことの処理は済み、患者が永遠の眠りにつくのももう時間の問題であるのだから、何も言わなくてもかまわないということを患者に知らせるだけでよい。それだけで患者は、もう何も話さなくてもひとりぼっちではないのだという確信を取り戻す。「やかましく」いろいろな言葉をかけるよりも、患者の手を握ったり、見つめたり、背中に枕を当ててやるほうが多くを語ることもある[25)]。

研究が始まった当初は、面接調査に協力してくれる患者を集めるのに苦労したロスだが、死の準備作業を共に始めるという姿勢を尊重することで、研究が始まってからは患者の方から調査協力の申し出があったと言う。終末期は終末期医療の為のホスピスや緩和ケア病棟が世界中に建設される大きな原動力となり、患者の生活の質（Quality of Life）も重視する医療へと転換が図られる契機を作った。

ただ、この死に行く過程の５段階には、批判される部分もある。ロスはこの段階論が誰にでも当てはまる訳ではないとしながらも、以下の様に述べている。

> 患者たちは、黙って話を聞いてくれる人がそばにいて、怒りを吐き出し、行く末の悲しみに泣き、恐怖や幻想を語るように促されると、すんなりと死を受容するものである。私たちは、患者がこの受容の段階に到達するまでにどれほどの試練を要し、やがて双方向のコミュニケーションが成立しなくなる「エネルギー喪失（デカテクシス）」に至るのかを認識しておくべきである[26)]。

この Decathexis の段階について、ロスは以下のように述べている。

そうして患者はある程度の期待をもって、最後の時が近付くのを静観するようになる。患者は疲れきり、たいていは衰弱がひどくなっている。まどろんだり、頻繁に短い眠りを取りたくなる。だがそれは抑鬱のときに欲する眠りとはちがって、回避のための眠りでもなければ、痛み・不快感・かゆみを忘れるための休息でもない。しだいに長い時間眠っていたいと思うようになる。それは新生児の眠りにも似ているが、最期の時へと近づく眠りなのである[27)]。

受容の段階については既に引用したが、ロスによる受容とは、最期の時を待つ静かな眠りなのである。Decathexis はエネルギー喪失とも訳されているが、ラテン語の Cathexis（充当）と対比される用語で、これまで生に固執してきた状態である Hypercathexis からの解放を示すものと考えられる。ただ、ロスの考えではDecathexisが最終の境地で、病院で死ぬということが、その様な理想的な死の形になるのだろうか。病院での死に方はその様な理想的な死に方を目指し、死ぬ為の準備を病院でしなければならないのだろうか。死にたくない死にたくないと思いながら死んでいく。その様な死に方があっても良いのではないだろうか。準備のできない死や突然の死など、死とは本来多様なものであり、予期出来ないものである。

（4）西田幾多郎の人生の悲哀

これまで、フロイト、ボウルビィ、キューブラー＝ロスによる悲しみの過程について見て来た。ここでは、日本の哲学者西田幾多郎自身が体験した死別の悲哀を考察してみたい。

西田は、自らの愛する我が子の死への思いを同じく愛する子を失った親友の藤岡作太郎の著作『国文学史講話』の序に寄せて以下の言葉を遺している。

たとえ多くの人に記憶せられ、惜しまれずとも、懐かしかった親が心

に刻める深き記念、骨にも徹する痛切なる悲哀は寂しき死をも慰め得て余りあるとも思う[28)]。

悲哀をとことんまで骨身にまでしみ込ませたいという思いの背後には、せめて自分が悲哀に徹することで愛する者を遺したいという痛切な思いがある。悲哀を身体に刻み込むことで、亡き子供と自身が一つになり、死の孤独から解放される。例え多くの人に記憶されず、惜しまれなかったとしても、せめて自分自身だけでも、記憶に遺したいと思うのが親心である。

西田は生涯を通して、愛する者の数多くの死に向き合って来た。13歳のころ姉尚（なお）を亡くしたことに始まり、実に4人の子供に先立たれ、弟憑次郎（つきじろう）、先妻寿美を喪っている。そのような運命に立たされた西田は悲哀の段階論に留まらない立場から次のように述べている。

折にふれ物に感じて思い出すのが、せめてもの慰謝である、死者に対しての心づくしである。この悲は苦痛といえば誠に苦痛であろう、しかし親はこの苦痛の去ることを欲せぬのである[29)]。

西田の悲哀には、悲しみを消し去るという方向ではなく、悲しみと共に、悲しみを抱えながら生きる姿勢が見られる。これは西田自身が『善の研究』の中で述べているが、西田の求める宗教的欲求とは、生の意義を真に理解することにある。また、西田の宗教的理解は、万有在神論であり、この世のものはことごとく神の顕現であると見る。『善の研究』における主要な概念の中に、「純粋経験」があるが、西田は、主観と客観が別れる以前の立場から、実在についての考究を始め、「純粋経験」を全ての立脚地に置いた。この西田の立場は、神と「個別的生命」との関係においても、自己の底を通って、大なる生命と繋がることを求める立場へと展開される。これは一見すると神秘主義者のように聞こえるが、西田自身は哲学の動機を人生の悲哀の中に求

めた。

西田の思想は、フロイトが考えたようにリビドーの減退と死者との同一化に留まらないものである。フロイト、ボウルビィ、キューブラー＝ロスによる悲しみの過程では､悲しみをいかに消し去るのかに主眼が置かれているが、死の悲しみに向き合い、死の痛みを抱えながら、死者と共に生きるというような悲哀の形もあるのではないか。

次章では、吉本ばななの小説『キッチン』を取り上げ、具体的な死との向き合いについて考察してみたい。

3．吉本ばななに見る死との向き合い

吉本ばななの小説の中には、処女作である『ムーンライト・シャドウ』以来、死との向き合いを主題として語られている作品がある。特に、前述の『ムーンライト・シャドウ』、『キッチン』、『満月―キッチン２』などの作品は、死の悲しみを扱いながら、食・性・家族についての記述が豊富で、死を描きながら生を描いている。ここでは吉本の一連の作品である『キッチン』『満月―キッチン２』から、死別体験後の心的過程の変遷を捉えつつ、死との向き合いを考え、そこから始まる生を捉えてみたい。ここで吉本ばななの小説を取り上げる理由は、第一に、通常の死に於ける悲哀と暴力による死に於ける悲哀の比較が可能だからである。第二に、死の悲哀の過程が主人公の内面が主人公を取り巻く周囲の世界の描写と共に語られているからである。最後に、この小説の中でのテーマには、感情の喪失、死別の悲しみの蓄積や暴力による死からの回復があり、様々な視点から死別後の心的過程について考えられるからである。これらの理由から、吉本ばななの作品を取り上げ、死との向き合いを考えてみたい。

私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う。(吉本ばなな『キッ

チン』６頁)[30]

この文章から始まる「私」の好きな場所は、「台所で息絶えたい」と思える程、好きな場所である。主人公の桜井みかげの両親は、「そろって若死にして」おり、「祖父母が私を育ててくれた」が、「中学へあがる頃に祖父が死」に、また２人で暮らして来た祖母が死んだところから物語は始まる。そのときの心境をこう表現している。

> 家族という、確かにあったものが年月の中でひとりひとり減っていって、自分がひとりここにいるのだと、ふと思い出すと目の前にあるものがすべて、うそに見えてくる。(『キッチン』７頁)

そして、そのときの悲しみは「涙があまり出ない飽和した悲しみ」である。悲しみの感情があまりにも大きい時、悲しみを悲しみ切れずに、悲しいという感情は立ち上っては来ない。悲しむという行為は、少なくとも悲しいことが現実に起きたということを受け入れられて初めて、成立するものである。その悲しみを抱えることはできずに、ただ悲しみを保持する。それ故、抱えきれない現実世界そのものを否定したくなる。現実世界の中のこと全てが信じられず、生きている世界と自分自身とが断裂したかのように感じてしまう。「私」の場合は、この段階では蓄積された悲哀が、大学生という時期とも重なり、「私」の中で増幅した悲しみを受け止められず、言わば冷蔵庫の中で凍らせた心を保持している。だからこそこの時期には、「しんと光る台所」に「ふとん」を引いて眠り、「冷蔵庫のぶーんという音が私を孤独な思考から守った」のである。

「私」は喪った家族を誰も居なくなった「台所」の中に見出し、例えそれがモーターの機械音であっても、そこに安らぎを感じて、何とか眠りにつくことができた。ユングの言う幻像 (imago) の中の家族像であり、この時「冷

蔵庫」の鼓動とも言うべきモーター音は、母の心音になり、母なる子宮である「台所」で、「星の下で眠り」、「朝の光で目ざめ」ることのみを「私」は欲した。

> 本当につかれはてた時、私はよくうっとりと思う。いつか死ぬ時がきたら、台所で息絶えたい。ひとり寒いところでも、だれかがいてあたたかいところでも、私はおびえずにちゃんとみつめたい。台所なら、いいなと思う。(『キッチン』 6頁)

ここで「みつめたい」のは、「死」だけだろうか。ここでみつめたいのは、本来的な心、魂とも言うべき自己自身と向き合う最後の瞬間ではないだろうか。その為の場所が、「台所」であり、同時に「私」の心の場所ともなる二重に包摂された場所である。家族を全て喪ってしまった「私」が最後に還るべき場所が「台所」なのだ。しかし、本来は母の子宮として生命を満たすべき「台所」も、今は「床に野菜くずがちらかっていて、スリッパで裏がまっ暗になるくらい汚い」。まるでこれまで何とか生きてきた「私」の心の様を象徴しているかのようだ。だけれども、「ものすごくきたない台所だって、たまらなく好きだ」と自身の心と「私」が住む世界を肯定している所に希望がある。「私」を産み、「私」の現在の命をかろうじて保ち、そして死んでいくところが「台所」なのだ。

この「私」が「台所がこの世でいちばん好きだ」と言う時、『臨床文学論』の著者である近藤裕子は、こう指摘している。

> 「私」と台所とは意識によって対象化される以前の主客未分化な述語(ノエシス)的融合状態にある。「私」が「台所」を好んでいることは、同時に「台所」が「私」を好ませていることでもある[31)]。

述語的自己同一の世界は、混沌とした主客一元の世界であり、統一された世界でありつつ、主語的我の失われた危うい世界である。ここで「台所がこの世でいちばん好きだと思う」と述べた瞬間に、主語的表現である「私」の出現によって、「私」と「台所」との分裂が起きる。

> 愛情関係のなかに溶けていた台所と「私」は、言語化によって、〈好む主体〉と〈好まれる対象〉とに引き裂かれ、さらに「私」自身も、〈思う私〉と〈思われる私〉―見る主体と見られる客体―とに分離させられてしまう。いやより正確に言うなら、〈思う〉という意識の志向性が「私」を視点と対象とにひき剥がすと言うべきかもしれない[32)]。

しかし、この自他の分裂が生じた「自己損傷の痛みと引き換え」に、「〈私〉が〈思う〉ことで〈私的世界〉の成り立ちそのものを問おうとしたものではなかったか」という問いを発する。ただ、近藤の指摘する「自己損傷の痛み」は、主語なる「私」の出現によってもたらされたものではないと考えられる。それは主客一元から主客二元に別れる以前、西田の言う「純粋経験」の段階から、この世に生まれ出るあらゆる生命の中に宿命付けられたものではないだろうか。「痛み」だけではなく、喜び、苦しみ、悲しみ、怒り、楽しみなどあらゆる感覚は、命の誕生と共に既にその生命の中に内包されている宿命とも言えるものである。そして愛する他者の死により、「痛み」という感覚に改めて目覚めさせられるのではないだろうか。そこから更に進めて言うと、〈私〉が〈思う〉ことで生まれたとする〈私的世界〉も、西田の「純粋経験」の立場から説明すれば、大いなる生命から生じた「私」の誕生と共に生まれたと考えるべきである。自らを構成するあらゆる世界は、「私」が我と他と分けることから始まり、そこに「自己損傷の痛み」を感じる主体そのものが、この世において在る存在と言える。つまり、「痛み」を否定的な物、消し去るべき物として認識することこそが、主体としての「私」の働きによる結果

であり、「私」が作り出したノエマ的概念によって意味付けられたノエシス的概念である。従って、「痛み」を「痛み」として認識する「私」が存在する以前に、「痛み」という感覚が存在しているとも言える。ところがこの小説の中では、私が私以外のものが抜け落ちてしまった後の世界をこう思考する。

> 私と台所が残る。自分しかいないと思っているよりは、ほんの少しましな思想だと思う。(『キッチン』 6頁)

ここでは「私と台所」と「台所」を対象化してみている。しかし、「自分しかいない」という独我論に陥ること無く、「私」とその「私」を生み出した「台所」との関係が残る。「私」と「私」を包む場所的存在である「台所」からこの物語は始まる。

それ故に、「私」が「台所」を愛そうとする行為は、自ら愛そうと努力すると言うよりも、より自然に自身が生まれた場所を愛す行為であると考えられ、「私」にとってその行為は意識するよりも、それ以前の行為である。むしろ意識によって失われていた感覚が蘇ったものと考えられる。その感覚がこの小説の中では、以下の一文の中に体現されている。

> 先日、祖母が死んでしまった。びっくりした。(『キッチン』 7頁)

祖母の死を経験した「私」は、その驚きを「びっくりした」と一語で表現する。この驚きを伴った喪失体験からこの物語は始まり、一旦「私」と「台所」以外の世界が抜け落ちてしまった、現実世界そのものを一旦否定した主客未分化な状態にまで還るところから始まる。両親を若くして無くし、中学の頃に祖父の死を体験した「私」であったが、幾度かの死別体験でも、そこまで混沌とした状態にはならなかった。それは、愛する他者である祖母の存

在が「私」を支えていた為である。中学以来、愛する祖母の死を恐れるという予期的不安を感じながらも、平和に暮らすことが出来ていたのである。それ故に、いつか必ず訪れると意識の上では判っていながらも、祖母の死には、心の深層から反応してしまい、一気に混沌とした世界へと還ってしまう。ただ、この混沌とした世界は、一見すると生命が枯れ果ててしまった無機質な世界を連想させるが、実際には化学反応を起こすきっかけさえあれば、無機質な世界から一気に有機物が顕れる生命のスープに似た世界であった。

> ―いつか必ず、だれもが時の闇の中へちりぢりになって消えていってしまう。
> そのことを体にしみこませた目をして歩いている。(『キッチン』32頁)

このような混沌の渦中にいる「私」の元を祖母の友人であった「田辺雄一」という他者が訪れる。「雄一」と出会い、「私」の中にも僅かずつだが、変化が生まれる。亡き祖母の行きつけの花屋でアルバイトをしていた「雄一」は、祖母の葬儀の時、「私」が「本気で祖母の愛人だったのかと思った」くらいに祖母の遺影の前で、「ぽろぽろと涙をこぼし」、「自分の祖母への愛がこの人よりも少ないのでは、と思わず考えてしまった」。祖母を通して出会った「雄一」は、「長い手足を持った、きれいな顔だちの青年」で、彼が周囲に抱かせる「“冷たい”印象」の裏側に、彼もまた悲哀を抱きながら生きていた。しかし、それに気が付く者は人生に於いて同じ「地獄のカマをのぞ」いてしまった者しかいない。「地獄のカマ」[33]の存在を自覚すること無く生きて来たであろう「雄一」の「前の彼女」にも、彼の本質は理解されなかった。この様に、二人が単純に会うだけでは、無機質な世界に生命は産まれない。実際、祖母の生前に既に二人は出会っていたのだ。ただ、「奇跡がボタもちのように訪ねてきた」ような出会いに繋がるには、生命を育み魂の座となる「部屋」が必要であった。

おじゃまします、とあがったそこは、実に妙な部屋だった。(『キッチン』13頁)

まず、台所へ続く居間にどかんとある巨大なソファーに目がいった。その広い台所の食器棚を背にして、テーブルを置くでもなく、じゅうたんをひくでもなくそれはあった。ベージュの布ばりで、CM に出てきそうな、家族みんなですわって TV を見そうな、横に日本で飼えないくらい大きな犬がいそうな、本当に立派なソファーだった。

「田辺家」の「部屋」は、広い台所と立派なソファーが目立った。そして、窓側に「ジャングルのようにたくさんの植物」を配し、家中のいたるところに花が飾られていた。家族を喪い無機質だった「私」の部屋と比べ、雑然としてはいるが、生命の力強さが至る所に宿る部屋がそこには在った。広い台所では、生命を維持するための食事が作られ、立派なソファーの存在は、そこで寛ぎ、語り合う家族の結びつきを深める。たくさんの植物には、自然の生命を感じ、いたるところに飾られた花は、死者を悼みつつ、異世界へと送り、生きている者には、いたわりと慰めを与える。その後、「台所」の中で、私の家にもあった「シルバーストーンのフライパンと、ドイツ製皮むき」を見つける。ここで、私は「横着な祖母が、楽してするする皮がむけると喜んだものだ」と亡くなった祖母の生前の姿を懐かしく思い出す。愛する者を亡くした後、愛する者を連想させる物を避けることもあるが、この場所では、亡き祖母の喜ぶ姿を思い浮かべている。人は今まで知らなかったものと親しむ際に、共通の要素を見つけ出すことから始めることが多い。それを「私」が見つけた時、「私」と「田辺家の部屋」の中に親和性が生まれ、その台所を私はこう表現する。

うんうんうなずきながら、見て回った。いい台所だった。私は、この台所をひとめでとても愛した。(『キッチン』15頁)

一目で気に入った、一目で好きになった、というのではなく、「ひとめでとても愛した」という表現を用いることで、「私」の気持ちが台所の中で亡くなった祖母と共に生き、お互いの感情が「私」の中で繋がった瞬間を顕している。こうして亡くなった祖母の喜ぶ姿が連想されるこの部屋で、私は再び生きようとする。その一方で、喪失直後から続く無感覚の状態から、ある一瞬、身体に感覚が繋がるという体験が生じる。

> ほとんど初めての家で、今まであまり会ったことのない人と向かいあっていたら、何だかすごく天涯孤独な気持ちになった。(『キッチン』15頁)

祖母の死を体験した後、ここで初めて生者との「対面」が行われる。ここでの対面は主客二元の意識と保ちつつ、主眼は自己の内へと向かう。「人と向かいあって」いる中で、「私」の中で「大きなガラス、にうつる自分と目が合う」という体験を伴いながら、省察が行われ始める。「天涯孤独」であること、そうであるが故に「どこへ行って何をするのも可能だなんてとても豪快」であること、「こんなに世界がぐんと広くて、闇はこんなにも暗くて、その果てしないおもしろさと淋しさに私は最近はじめてこの手でこの目で触れた」ことに気が付く。死を見つめさせられる前と後の世界の違いは、「今まで、片目をつぶって世の中を見てたんだわ」と思えるくらいに異世界である。喪われてこそ、得られるものがある。死者の生存を心の底から望むからこそ、それがこの世では決して叶わないことを痛み、その痛みによってしか開かれない世界もある。喪失体験からの回復ということが言えるための一つの可能性として、痛みを伴う自己世界の深化とも言うべき変容が生じる体験にあるのではないだろうか。

ここで二人は会話を交わし、「雄一」は、私に部屋を使ってもらおうとすることが、当然のことのように話しをする。この時の彼の態度が「決してひ

どくあたたかくも冷たくもないこと」が、私を「とてもあたためるように思え」、「泣けるくらいに心にしみるものがあった」。死別の悲哀が主となる面接においても、治療者がクライエントを慰めようとして発した言葉であっても、言葉の受け手によっては、堪え難い苦痛と感じることがある。例えば、西田も、「人は死んだ者はいかにいっても還らぬから、諦めよ、忘れよという、しかしこれが親に取っては、堪え難き苦痛である」と述べている。他者を慰めようと考えて、発せられた言葉も、相手への共感無くしては、鋭い刃となって他人を傷付ける事にも成りかねない。しかし、ここでの「雄一」の私を特別哀れむことのない態度が私の心に直接響いたのである。そして、その時に、私は雄一の母の「えり子」と田辺家の部屋で出会う。

> 私はびっくりして目を見開いてしまった。かなり年は上そうだったが、その人は本当に美しかった。日常にはちょっとありえない服装と濃い化粧で、私は彼女のおつとめが夜のものだとすぐに理解した。(『キッチン』17頁)

私にとって、「えり子」との最初の出会いは「驚き以上」であった。「その全体からかもし出される生命力のゆれみたいな鮮やかな光――人間じゃないみたいだった」、「心の中にあたたかい光が残像みたいにそっと輝いて、これが魅力っていうものなんだわと私は感じた」。「えり子」は「私」の中に、瞬間的に圧倒的な生命力を感じさせる存在であった。更に、私を驚かせることに、「えり子」は整形していて、「しかも」男であった。この本名を「雄司」という「えり子」は、「若い頃に何かの事情で引き取られた」家の娘と「恩を捨ててかけおち」した。その後、若い頃に「雄一」の「本当の母親」が亡くなり、幼い「雄一」を抱えて「何をしようか考えて」、「女になることを決め」、整形をした「残りの金でそのすじの店を一つ持って」、「雄一」を育てた。「田辺家」が抱える歴史を聞き、同じ屋根の下で眠ることによって、「私」の

中の「孤独」が消失した。自己の内に抱える不安も、自己の中に侵入しようとする他者の存在も無かった。「田辺家のソファー」では、「眠りを味わう」ことができ、「草花の呼吸」を聞くことができた。「私」は「田辺家の部屋」から、「アルバイト」に行き、「そうじ」をし、「TV を見たり、ケーキを焼いたりして、主婦のような生活」をする中で、「少しずつ、心に光や風が入って来る」ことを感じる。その一方で、「私」は祖母の家の荷物を片付けながら、祖母の死と向き合い続けていた。ある日、まだ残っている荷物整理のために元の部屋に戻った時、「私」は祖母の死を深く実感する。

> 祖母が死んで、この家の時間も死んだ。
> 私はリアルにそう感じた。もう、私には何もできない。(『キッチン』34頁)

これまで否認していた現実を再認識する瞬間、祖母と暮らした家にはこれ以上暮らせないという現実を認識し、「田辺家」での新しい生活へと戻って行く。抱え切れずにいた現実を「もう何もできない」と否定しながら、現実に即して否定する自分を肯定する。断絶していた世界と「私」が再び繋がるという体験をしている。ただ、食事を並べるためのテーブルを欠く、「田辺家の部屋」には常に危うさを孕んでいた。「一ヶ月近く同じ所に住んでいて」、初めて「私」が「雄一」の心に触れたと思った時に、「引っこしハガキ」を書きながら、「部屋」を出ることを考えたり、「田辺家」の食事では、「玉子がゆ」、「きゅうりのサラダ」、「バナナジュース」などが出され、柔らかく質素な病院食を連想させるからだ。「私」にとって「田辺家の部屋」は一時的な住まいに過ぎない。それでも、「私」にとっては、「部屋」を出てからも「何度も何度も」帰れる場所になっていた。家族も家も全て喪った「私」の中にできた帰るべき「故郷」であるとも言える。その「故郷」の存在に気が付いた時、改めて自己の体験の再構成が行われる。

ついこの間までのことすべてが、なぜかものすごい勢いでダッシュして私の前を走りすぎてしまった。(『キッチン』50頁)

度重なる家族の喪失体験により、「私」は悲しみを悲しみ切れずに保持したまま、目の前の出来ることを少しずつでもこなして来た。こうして現実に適応をする一方で、これまで保持して来た悲しいという感覚が生身の身体と繋がる瞬間が訪れることがある。この小説の中では、家を引き払った帰りのバスの中で、「私」は、「小さな女の子」と「おばあさん」が話しをする姿を見た時、私の中で洞察が生じた。

私は思った。おばあさんの言葉があまりにやさしげで、笑ったその子があんまり急にかわいく見えて、私はうらやましかった。私には2度とない……。(『キッチン』53頁)

気が付くと「私」の「ほおに涙が流れてぽろぽろと胸元に落ちている」。バスを降り、「こんなに泣いたのは生まれて初めてだった」というくらい泣いた。それまでに保持して来た悲しみの塊が一気に溶解するかの如く涙が流れる。

何が悲しいのでもなく、私はいろんなことにただ涙したかった気がした。(『キッチン』55頁)

この涙は、悲しみがもたらしたものでは無く、涙を流すことで、悲しみ切れなかった感情の塊を溶かすための涙である。その涙の後は、「私はどうしようもなく暗く、そして明るい気持ちになってしまって、頭をかかえて少し笑った」。この涙の後に、「私」は「雄一」と同じ夢を見る。だからと言って、「私」にとって「田辺家」の「台所」が私達の「台所」となることは無い。

ただ、「私」には、今、ここに「実力派のお母さんと、やさしい目をした男の子」と、「同じところ」にいることが全てである。

夢のキッチン。

私はいくつもいくつもそれをもつだろう。心の中で、あるいは実際に。あるいは旅先で、ひとりで、大ぜいで、ふたりきりで、私の生きるすべての場所で、きっとたくさん持つだろう。（『キッチン』67―68頁）

祖母の死によって、喪われた「私」の生きる場所が、「夢のキッチン」という形で再び現れた。自己と自己が生きる場所の自覚こそ、人が生きて行く上で根底となるものである。「私」は、実際にそのキッチンを手にすることができ、それを心の中に保持することができた。そのことはまた、「私」にとっての祖母の死を心の落ち着く場所へ納めることができたことの現れではないだろうか。ところが、祖母の死と向き合い、祖母との記憶を心の中へ保持することができた「私」の本へ、再び愛する者の死が訪れる。

秋の終り、えり子さんが死んだ。（『満月』70頁）

『満月―キッチン２』の冒頭で、衝撃の事実が告げられる。『キッチン』と『満月―キッチン２』が一体の作品でありながらこの二つの作品に分けられているのは、突然の暴力的な死によるものである。

祖母の死によって、天涯孤独の身になった私は、再び田辺家の家族の一員となる。その父親であり、母親代りのえり子さんが、「気の狂った男につけまわされて、殺された」[34] ところから再び物語りは始まる。『キッチン』の死が唯一の肉親である祖母の死からの回復が主題であったのに対して、『満月―キッチン２』では、実際の血のつながった家族ではないが親しい他者の暴力による死との向き合いが主題となっている。

そのことを知ったのは、もう冬に入ってからだった。すべてが終わってからずっとたって、やっと雄一が電話をよこしてきた。

私にはわからなかった。私には、わからない。

ますます信じられるはずもなく、私の瞳は凍りつき、受話器が瞬間、ぐんと遠ざかった。(『満月』71頁)

「雄一」にとっても、母親であり父親である唯一の家族を喪ったことを「私」に告げるという行為に移すことすら、半月から一月程の時間を必要としている。同様に、突然の死を告げられた直後の「私」も、「私には、わからない」と現実感覚を欠いてしまっている。

ボウルビィによると、人間は愛する者の死に対して、まず無感覚(numbing)の状態が生じるとされる。まして予期しない、突然の死の知らせに対応するための防衛反応として、現実認識そのものが遊離してしまう程の衝撃を感じることがある。そして死を受け入れられず、周囲で起こっていること全てを否定してしまう。自らの死の受容過程を研究し、分類したロスによれば、死に行く過程の5段階の最初の段階は「否認と孤立」(denial & isolation)とされ、他者の突然の死に対する反応とも共通する。現実を受け入れられない状態と考えれば、ボウルビィの指摘する無感覚の状態とロスの否認と孤立の段階とは、多くの点で共通性が見られ、一人称の死である私の死を受け入れることも、二人称の死である愛する他者の死を受け入れること、その両者に同様の心的過程がある。ただ、無感覚の段階は、現実感覚の喪失であるのに対し、否認と隔離の段階は、現実認識の拒否という差異が認められる。ここで言う現実感覚の喪失とは、自己と現実界との関係の解離であり、しばしば離人感を伴うものである。この喪失を体験した者は、現実に存在してはいるが、存在しているという感覚が稀薄になり、世界が抜け落ちて行くという感覚に陥る。その一方で、現実認識の拒否とは、現実認識は保たれているものの、その一部を認めることを拒否することである。ロスも初期の否認自体は、

認めているものの死の受容から遠ざかる防衛規制としており、受容の段階が進むにつれ、より穏やかな防衛規制を使うとしている。

死についての詳しい説明を聞けば聞くほど、その死を現実として受け入れ難いという心理規制が働く。あまりに衝撃が強く、また突然のものであれば、凍りついた記憶（frozen memory）として自己の中に保存される場合もある。この凍りついた記憶とは、自己の中にそのときの情景や感情の記憶の情報が、氷の中に閉じ込められたかのようにそのまま保存されるというものである。氷のまま保存された記憶は、数ヶ月、また数年後でも、その時に感じた感情のまま、見た情景のままで保存されているため、大変ショックな状況や、同じような状況に遭遇した際に、生々しい記憶としてその時の状態のまま蘇ってくることがある。それだけではなく、この記憶にも心的エネルギーが常に注がれているため、心的エネルギーの不足がおこり、全般的に活力の枯渇が起こることもある。

この中で「私には、わからない」とは、現実認識の拒否を表し、「受話器が瞬間、ぐんと遠ざかった」のは、私と現実世界との間で裂け目が生じ、私と世界との分裂を表現したのではないだろうか。これらの表現より、「私」の中で、無感覚の状態と現実の否認が同時に生起しているように見られる。

> 私は胸の肉をえぐりとられたような気分になった。それではもう彼女はいないのだ。今はもう、どこにもいないのだ。（『満月』72頁）

無感覚の状態に留まらず感覚が蘇って来る時、他者の死を自覚すると共に、死の衝撃が強烈な身体感覚となって感知されることもある。「胸の肉をえぐりとられた気分」が起こるのは、愛する他者が記憶の中においては、あたかも自己自身の一部となっていることにより生じるのではないだろうか。フロイトが指摘したように、愛する他者の死は、あたかも自己自身の一部を喪ってしまうがごとくに感じられるのである。

私は自分のエネルギーがものすごい勢いで全身から出ていってしまうのを止められないと感じた。しゅうしゅう音をたてて、闇に消えてゆく。

そして祖母が死んでたったひとりになってしまった時、その時よりも今、ずっと孤独を感じる。(『満月』75頁)

「自分のエネルギーがものすごい勢いで全身から出ていってしまう」、「しゅうしゅう音をたてて、闇に消えていく」という肉体的感覚を伴った死の悲哀は、やがて「孤独」を感じるに至る。また、殺人という暴力による死は、人間存在そのものを問うことになる。なぜなら、殺す者も殺される者同じ人間であるからである。それ故、暴力による死からの回復には、私と他者、及び私と世界との関係性そのものを打ち壊す程の圧倒的な衝撃を経たものとなる。ここで「私」は、「足を進めることを、生きてゆくことを心底投げ出したかった」[35]と思うようになる。次いで、死の悲哀は、「私」の内に留まらず、「私」と「えり子」を包んでいた場所にまで広がって行く。

部屋は、秒を刻む時間を感じさせないほどにしんとして、私だけが生きて活動していることを申しわけなく思うような静止した雰囲気をかもし出していた。人が死んだ後の部屋はいつもこうだ。(『満月』85頁)

部屋もその主を失った瞬間から時間の流れが止まる。西田の言う場所的存在である人間の死は、無生物である部屋にまで影響を及ぼす。時が止った空間の中で、「人が死んだ後の部屋はいつもこうだ」と言う「私」の言葉を通して、これまで幾多の死が「私」の本を訪れたのかを物語っている。しかし、幾多の死を通してこそ輝くことが出来る所に生の意義があり、ここで「私」の内でも死から生への転回が生じる。

その人はその人を生きるようにできている。(『満月』90頁)

この表現の中には、西田の思想にも共通するものが見られる。西田は知人への書簡の中で、「人は人、吾は吾、吾はわが誠を尽すより外なしと思いおるがいかん」[36] と自己の胸中を問うている。人を羨む心、過去の選択を悔いる心、自己を蔑む心、それらの種々の迷いから超え出て、「吾」には、「吾」の「誠」の「道」を進むより他に「道」が無いという決意が込められている。つまり、この道とは、「吾」が選ぶものでも、選ばされるものでもなく、選びつつ選ばれるものである。人は、この道をいかに生きるのか、そのことが問われていることを自覚しつつ、死ぬことを宿命付けられた生を生きる生き方である。西田哲学の後期には、日常の苦悩や迷いを抱え込んだままで生きる姿勢を「平常底」としている。

一方、「生きるようにできている」とは、人間の中に生まれながらにして持つ生命の力強さとその人間に課せられた宿命の逃れ難さの両面を暗示しているように思われる。吉本の表現の中にも、自らの人生を引き受けざるを得ない運命を感覚的に受け取って、人は人生を選べないながらも、懸命に生きようと言う姿勢が見受けられる。その境地を生きている際、偶然に目に入った光景にも心が現れてくる。

> どうしても自分がいつか死ぬということを感じ続けていたい。でないと生きている気がしない。だから、こんな人生になった。
>
> もうたくさんだと思いながら見あげる月明かりの、心にしみ入るような美しさを、私は知っている。（『満月』91頁）

このように言う「私」が、ある瞬間ふと見上げる夜空に、月の清らかな光が在る。例え、嵐のように感情の波が心の中を渦巻いている時でも、ほんのささいな瞬間に、限りない慰安を感じることがある。その瞬間には、私を包み、そして静かに私を見守っている大なる自然の存在が感じられるものであ

る。同様の心境を表すものとして、西田が詠んだ短歌の中に以下のものがある。

浪狂ふ試煉の海もやつなぎて月影あはし初夏の天[37)]

しかし、そうは言っても、簡単に死を受け入れることなどはできない。自らの死も、他者の死も、生と死との間には、永遠の断絶とも言える絶対の不可逆性が横たわっている。この不可逆性から超出することは容易ではない。それどころか、愛する他者の死という現実を直視することすらままならないものである。

私にとって、えり子さんの死はまだ遠くにあった。まともに受けとめることができない。ショックの嵐の向こうから、少しずつ近づいてくる暗い事実だった。(『満月』95頁)

死別の悲哀は、行きつ戻りつしながらも生と死の間を漂う。表1では、「私」(桜井みかげの回復過程)を連想、協同、場所、食という4つの視点から時系列に整理した。これまで論じて来たように愛する者の死からの回復過程には、段階論では決して分類出来ない複雑な過程が含まれていると考えられる。ただ、暴力による死からの回復に見られる一つの希望として、『キッチン』の中では、ある転回が語られている。

えり子さんはもういない。
―その光景の中で、私は今度こそ本当に知る。雄一と私がどうであろうと人生がどんなに長く美しくても、彼女にもう会えなくなってしまった。(『満月』157頁)

「今度こそ本当に知る」という表現からは、これまで何度も繰り返された愛する他者の死の認識から飛躍して、ある瞬間にはっきりとした愛する他者の死の自覚に目覚めたことが示唆される。こうした死の自覚により、死は再び生へと転回を始め、止っていた時は再び流れ出す。無機質な入れ物に過ぎなかった「私」の部屋には、再び「あたたかく、わいたお湯の蒸気が満ちてゆく」。あたかも息を吹き返すように、「私」と共に台所のある「部屋」にも生命の蒸気が満ちる。

ここまで死が孕む暴力という視点から、人間存在の回復について論じて来た。その中で悲しみや苦しみという感覚は、回復という視点からだけでは、捉え切れない部分があるように思われる。それは、涙によっても、喪の作業によっても、死の受容によっても、家族を喪った悲しみを消すことは出来ないからである。ただ、心の中に喪った愛する者のことを抱えて生きようする自分自身を信じることはできる。自分自身が生き続ける限り、心の中で愛する者も生き続けている。悲しみや痛みが消え去るということは、心の中からも愛する者が消滅することを意味している。それ故に、愛する者の面影を心の中に残す為に、悲しみや痛みを抱えながら、それと共に生きるという生き方もあるのではないだろうか。本論文では、悲しみの過程の諸理論を紹介しながら、文学作品を通して実践的に死との向き合いについて論じて来た。その中で、愛する他者の悲しみを抱えながら日常を生きることは、愛する他者との繋がりを生きることであり、汝の死を通して、私の生への転回をももたらす契機となることが見出された。

表 1

「私」(みかげの回復過程) 連想・協同・場所・食

「祖母の死」

台所(連想)
6頁 「私がこの世でいちばん好きな場所は台所だと思う。」

他者の台所(場所)
16頁 「うんうんうなずきながら、見て回った。いい台所だった。私は、この台所をひとめでとても愛した。」

食事を作る(食)
27頁 私は、玉子がゆときゅうりのサラダをえり子のために作り、えり子はうれしそうに食べてくれる。

主婦のような生活(食)
33頁 「そうじをしたり、TV を見たり、ケーキを焼いたりして、主婦のような生活」

えり子さんのプレゼント(連想)
49頁 「出ていく時、これを持ってゆくし、出てからも何度も何度も来て、おかゆをつくりますから。」
「大切な大切なコップ。」

引っ越し(場所)
49頁 元の家を正式に引き払う。「やっと、すべてを片付けた。のろかった」。

涙(連想)
54頁 小さな女の子とおばあさんの会話を聞きながら、気が付く涙が流れ、わんわん泣いた。

夢(協同)
56頁 引き払ったあの部屋の掃除を雄一としている夢。
61頁 「公園で屋台のラーメン食べような」。

ジュースとラーメン(食)
64頁 「すごい音で作られる2人分のジュースの音を聞きながらラーメンをゆでていた」。
この瞬間が、「奇跡のようにも思えるし、あたりまえにも思えた」。

料理(食)

88頁　集中して独学で料理を学ぶ。「頭の中で細胞がふえるような感じ」。

新しい人生の選択と引っ越し（場所）
73頁　大学を辞めて料理研究家のアシスタントになる。
田代家を出る。

「えり子の死」

雄一からの電話
71頁　「あいつは、ちゃんと戦って死んだんだ」。
「母親……ああ、父親っていうべきかあ。殺されたんだ」。

みかげの反応
71頁　「私にはわからなかった。私には、私には、わからない」。
72頁　「私は胸の肉をえぐりとられたような気分になった。それではもう彼女はいないのだ。今はもう、どこにもいないのだ」。

田辺家のソファー（場所）
83頁　「なつかしい。気が変になるほどなつかしい」。

半分のパン（食）
84頁　私は自分のパンを半分雄一に分ける。
「２人で TV に向かってそうしていたら、本物のみなしごのようで、変な気分になった」。

台所（連想）
87頁　久々の田辺家の台所の掃除をする。
「どうして私はこんなにも台所関係を愛しているのだろう、不思議だ。魂の記憶に刻まれた遠いあこがれのように愛しい。ここに立つとすべてがふり出しに戻り、何かが戻ってくる」。

夕食作り（食）
94頁　「２時間をかけて、私は夕食を作った」。

えり子さんの死（連想）
95頁　「私にとって、えり子さんの死はまだ遠くにあった。まともに受けとめることができない。ショックの向こうから、少しずつ近づいてくる暗い事実だった」。

地獄のカマ（連想）

100頁　「…私と雄一は、ときおり漆黒の闇の中で細いはしごの高みに登りつめて、いっしょに地獄のカマをのぞきこむことがある」。

カレー作り（食）
113頁　勝手にカレーを作って食べ、残りを雄一にあげる。

冬の喫茶店での回想（連想）
115頁　「さして重要でなかった、かけがえのないことが、ふいにこんなふうに冬の喫茶店でよみがえってくる」。

それぞれが戦う夜（連想）
125頁　「今夜も闇が暗くて息苦しい。とことん滅入った重い眠りを、それぞれが戦う夜」。

冬の青空（場所）
131頁　「冬のつんと澄んだ青空の下で、やりきれない。私までどうしていいかわらなくなる」。

カツ丼（食）
141頁　旅先の夜、私は一人でおいしいカツ丼にめぐり合う。

カツ丼を雄一に届ける（食）
152頁　「雄一はふたをあけ、さっきおじさんがていねいにつめてくれたカツ丼を食べはじめた」。
それを見たとたん、私の気持ちは軽くなった。

記憶（連想）
152頁　「―私は知る。楽しかった時間の輝く結晶が、記憶の底の深い眠りから突然覚めて、今、私たちを押した。新しい風のひと吹きのように、私の心に香り高いあの日々の空気がよみがえって息づく」。

えり子さんの死の自覚（連想）
157頁　「えり子さんはもういない。
―その光景の中で、私は今度こそ本当に知る。雄一と私がどうであろうと人生がどんなに長く美しくても、彼女にもう会えなくなってしまった」。

あたたかい部屋（場所）
161頁　「部屋はあたたかく、わいたお湯の蒸気が満ちてゆく」。

注

1）弘法大師空海全集編輯「『教王経開題』」『弘法大師空海全集＜第３巻＞思想篇（３）』、2001年、筑摩書房
2）mourning、grief、mourning work は、欧米の研究によるところが大きい為、各用語の訳] が一定していない。そこで、本研究では、松井（1997）に基づき、悲嘆（grief）、悲哀（mourning）と喪の作業（mourning work）という訳に統一する。
3）Freud, S.（1917）：Trauer und Melancholie. Unknown.（井村恒郎・小此木啓吾他訳（1970）：悲哀とメランコリー, フロイト著作集　第六巻. 人文書院.　137ページ）
4）前掲書、137-138ページ
5）前掲書、138ページ
6）Freud, S.：Jenseits des Lustprinzips.（須藤訓任訳（2006）：快原理の彼岸, フロイト全集17　岩波書店.　90ページ）
7）前掲書、92ページ
8）Freud, S.：Das Ich und das Es.（道旗泰三訳（2007）：自我とエス, フロイト全集18　岩波書店.　38ページ）
9）前掲書。
10）リンデマンが、一般には悲哀（mourning）という言葉が、葬送儀礼など哀悼の社会的側面を指し示す傾向があることから、grief（悲嘆）が用いられる様になった。
11）Lindemann, E.（1944）：The Symptomatology and Management of Acute Grief. American Journal of Psychiatry, 101, 141-148.
12）American Psychiatric Association（1994）：Quick Reference to the Diagnostic Criteria from DSM- Ⅳ. Amer Psychiatric Pr（高橋三郎・大野裕・染矢俊幸訳：DSM- Ⅳ精神疾患の分類と診断の手引. 医学書院. 245-246ページ）
13）瀬藤万里子・阪武彦・丸山総一郎（2004）：死別後の悲哀に関するフロイトの見解とその批判 . 神戸親和女子大学研究論, 37, 21-38.
14）須藤訓任（2006）：解題, フロイト全集17　岩波書店）
15）Freud, S.（1917）：Briefe 1873-1939. Unknown.（井村恒郎・小此木啓吾他訳（1970）：書簡集，フロイト著作集　第八巻．人文書院．336ページ）
16）Freud, S.（1917）：Briefe 1873-1939. Unknown.（井村恒郎・小此木啓吾他訳（1970）：書簡集，フロイト著作集　第八巻．人文書院．352ページ）
17）Bowlby, J.（1980）：Attachment and Loss（Ⅲ）Loss : Sadness and Depression. The Hogarth Press.（黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳（1981）：母子関係の理論Ⅲ愛情喪失. 岩崎学術出版社）
18）リンデマンの言う正常な悲嘆とは、対象を喪失したものなら誰でも通過する心的な過程であり、病的な悲嘆とは、正常な悲嘆が、歪められ、複雑化した悲嘆と定義された。そして、この病的な悲嘆に関して、他者による援助の必要性が主張された。
19）Lindstrom, T. C.（2002）："It ain't necessarily so"...challenging mainstream thinking

about bereavement. Family and Community Health, 25, 11-21.
20）Bowlby, J.（1980）：Attachment and Loss（ Ⅲ ）Loss:Sadness and Depression. The Hogarth Press.（黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子訳（1981）：母子関係の理論Ⅲ愛情喪失. 岩崎学術出版社）
21）前掲書。
22）Ross, E.（1969）：On Death and Dying. Simon & Shuster, Inc.（鈴木晶訳（2001）：死ぬ瞬間 -死とその過程について. 中央公論新社.　193ページ）
23）前掲書、5-6ページ
24）Ross,E.（1983）：On Children and Death. The Barbara Hogenson Agency, Inc.（鈴木晶訳（2007）：子どもと死について. 中央公論新社）
25）Ross,E.（1969）：On Death and Dying. Simon & Shuster,Inc.（鈴木晶訳（2001）：死ぬ瞬間-死とその過程について. 中央公論新社.　193-194ページ）
26）前掲書、202ページ
27）前掲書、193ページ
28）上田閑照編「我が子の死」『西田幾多郎随筆集』、78ページ、1996年、岩波書店
29）上田閑照編「我が子の死」『西田幾多郎随筆集』、75ページ、1996年、岩波書店
30）吉本ばなな「キッチン」『キッチン』、６ページ、1991年、福武文庫
31）吉本ばなな「満月-キッチン２」『キッチン』、100ページ、1991年、福武文庫
32）近藤裕子「淋しい身体　浮遊する台所―吉本ばななキッチン論」『臨床文学論』、31ページ、2003年、彩流社
33）前掲書、32ページ
34）吉本ばなな「満月-キッチン２」『キッチン』、100ページ、1991年、福武文庫
35）前掲書、75ページ
36）上田閑照編「書簡抄」『西田幾多郎随筆集』、371ページ、1996年、岩波書店
37）前掲書、239ページ

（近藤　正樹、立命館大学文学研究科博士後期課程）